

OMF

OMF

SCHUMANN

Chika Inaoka

ARABESKE, KREISLERIANA, KINDERSZENEN

1

ARABESKE OP. 18 [6:27]
アラベスク 作品 18

2

KREISLERIANA *Fantasien* OP. 16
クライスレリアーナ 作品 16

3

I. Äußerst bewegt | 激しく動いて [3:01]
II. Sehr innig und nicht zu rasch | 心をこめて、速すぎずに [9:07]

4

III. Sehr aufgeregt | 激しく駆り立てられて [5:13]

5

IV. Sehr langsam | 非常にゆっくりと [4:28]

6

V. Sehr lebhaft | 非常に生き生きと [3:35]

7

VI. Sehr langsam | 非常にゆっくりと [4:24]

8

VII. Sehr rasch | 非常に速く [2:19]

9

VIII. Schnell und spielend | 速く、諧謔をもって [3:46]

KINDERSZENEN OP. 15
子供の情景 作品 15

10

I. Von fremden Ländern und Menschen | 見知らぬ国々と人々 [1:46]

11

II. Kuriose Geschichte | 珍しいお話 [1:11]

12

III. Haschemann | 鬼ごっこ [0:36]

13

IV. Bittendes Kind | おねだり [0:58]

14

V. Glückes genug | みちたりの幸福 [1:41]

15

VI. Wichtige Begebenheit | 重大な出来事 [0:53]

16

VII. Träumerei | トロイメライ [2:51]

17

VIII. Am Kamin | 炉端で [1:03]

18

IX. Ritter vom Steckenpferd | 木馬の騎士 [0:52]

19

X. Fast zu ernst | むきになって [2:05]

20

XI. Fürchtenmachen | こわがらせ [1:48]

21

XII. Kind im Einschlummern | こどもは寝入る [2:11]

22

XIII. Der Dichter spricht | 詩人は語る [3:50]

ROBERT SCHUMANN | ロベルト・シューマン (1810 - 1856)

Arabeske, Kreisleriana, Kinderszenen | アラベスク、クライスレリアーナ、子供の情景
Chika Inaoka | 稲岡千架

Instrument: C. BECHSTEIN Model D-280 (S/N: 187906)
Recording location: Minamiaizu Culture Hall at Okurairi Exchange Center, Fukushima,
September, 2025

収録：御蔵入交流館 | 南会津町文化ホール、2025 年 9 月
調律：加藤正人、アーティスト写真：相田憲克、協力：株式会社ベヒシュタイン・ジャパン

Engineer: Hironori Kosaka | Piano Tuner: Masato Kato
Artist photo: Norikatsu Aida

KCD-2099 ©&© 2025 OMF DXD-Recordings DDD STEREO Total Time: 64'15" Made in Japan

Ⅱ 人々と音楽に捧げるアルバム

このシューマン・アルバムは、私のピアニスト人生における新たな一歩です。これまでに出会った人々と音楽から生まれた作品です。

前作は 2019 年ドイツ・ノイマルクトで収録したモーツァルトのアルバム。それから 6 年の歳月を経てのレコーディングとなりました。2020 年に白血病を発症し、生死を彷徨いました。2024 年に病後初めてのドイツ・ケムニッツ公演を終えた翌日、友人の誘いでふと訪れたのはレーゲンスブルク——そこは 2018 年に OMF エンジニア & ディレクターの小坂浩徳氏と収録地のリサーチやピアノ選定の下見に訪れ、前作の収録地をノイマルクトで行うことを決断した街だったのです。レーゲンスブルクの石橋の上に立った時、不思議な声が胸に響きました「人生の続きをしていいんだよ」と。偶然にもその日は私の誕生日で、奇跡のような巡り合わせに胸がいっぱいになり、友人にすがって泣き崩れました。その場で直ぐに小坂氏に連絡し、帰国して会うことになりました。「モーツァルト・アルバムの続きを」と考えていた私に、彼は投げかけました。「稲岡さん、シューマンをやってみませんか？」と。その一言は意表を突くものでしたが、いつもアルバム制作を動かすのは、彼のそうした一瞬のひらめきなのです。

そんなことをキッカケにして 4 枚目となるこのアルバムは、10 代から親しんできた《子供の情景》《アラベスク》、そして 20 代から弾き続けてきた《クライスレリアーナ》を収録しました。《クライスレリアーナ》は私が初めてベヒシュタインという楽器に触れた作品でもあります。多感な 10 代、ドイツ留学した 20 代、我武者羅に活動し、レコーディングをはじめた 30 代、そして 40 代でノイマルクトでのレコーディング、闘病と復帰——その歩みを経て、2025 年にドイツ・ディルスベルクでアーティスト・イン・レジデンスとして過ごした 3 か月は、一芸術家としてかけがえのない時間となりました。

今回の録音会場、南会津町文化ホールには、イェルク・デームス氏も奏でたベヒシュタイン D-280 が設置されています。彼もここで《クライスレリアーナ》を弾いたようです。会場と楽器は相性よく響き合い、私がレコーディングで重要視する一つの条件が当てはまりました。セッションでは、信頼する小坂氏に身を委ねました。彼は誰よりも真摯に、まるで音を「視る」ように私の音楽と向き合い、時に怖いほどでした。音楽を見透かされるような鋭いディレクションのなかで、眠っていた深層が引き出される——それはまさに「対峙」の時間でした。

今回もベヒシュタインを選んだのは、その個体にフォルテピアノの遺伝子を感じたからです。奥行きのある音の世界を築きたいと望んだ私の狙いは、セッションの中で想像を超える速さで進化していきました。それは調律師の加藤正人氏、小坂氏との非常に繊細なやり取りを重ねることで生まれた音であり、実験的でもあり、私ひとりでは決して創り得ない世界でした。

人生とは、音楽とは、人の力とは、なんと素晴らしいのでしょうか。想像を超えた世界に出会うとき、人の心は震えます。そして自分一人の世界の小ささを知ります。人と音楽が、私の知らなかった世界を開いてくれるのです。

今は音楽を容易に聴ける時代です。しかし、あまりに簡単に手にできるがゆえに、私たちは「大切な何か」を失ってはいないでしょうか。私は音楽の無限の広がりを見たいと願います。そのためには「静寂」や「無」といったものも欠かせないと感じています。

このアルバムは、聴く人の心の奥に眠っているものをそっと開き、音を本のように味わっていただきたいと願って創りました。あなたの世界のなかでさらにシューマンの創造を広げていただけたなら、これ以上の幸せはありません。

皆さまの幸せを祈り、心からの感謝と愛を込めて。

2025 年 9 月 稲岡 千架

Ⅱ 楽曲解説

◇ ロベルト・シューマンの1838年

ロベルト・シューマンとその妻クララがどのような流れで結婚したのか、その実情は今日かなり明確に判明している。二人とも非常に筆マメでコンスタントに日記をつけていたのに加え、双方の間に交わされた多くの書簡が残されているからだ。

幼少時からピアニストとして天才ぶりを謳われ、ヨーロッパにその名を轟かしたクララ。彼女を育てた父であり、多数の優秀な音楽家を世に送り出していた名教師ヴィーク。住み込みでヴィークに弟子入りしたロベルト。最初は兄弟のような関係だった師匠の娘と弟子は、紆余曲折の末、激しい恋に落ちることになる。

1837年（ロベルト27歳、クララ18歳）8月14日の手紙で二人は密かに婚約した。その後、父ヴィークに結婚の申し込みをするがにべもなく拒絶され、そこから結婚をめぐる激しい争いが幕を開ける。ヴィークとしては手塩にかけた我が娘が、よりもよって気まぐれで躁鬱の激しい夢見がちな若僧に奪われてしまうことが耐えられなかったのだろう。

青年期から顕著に現れていたシューマンの躁鬱気質は、数々の証言や記録にその姿を見出すことが出来る（恐らく双極性障害であったと考えられている）。そして婚約の翌年、1838年1月には確かに彼の精神は大きく高揚していた。年明け早々からクララに28枚もの手紙を送り、二人の新しい未来、音楽活動、作曲への闘志を燃やしている。一方でヴィークが頑迷に結婚を認めてくれないことへの焦燥、苛立ちから来る憂鬱。この時期、かつてないほど忙しい、激情の振幅が絶えず彼を襲っていたのである（ちなみにクララは手紙で「父が相変わらずあなたの酷い悪口を言っている」とか「あなた弦楽器の使い方よく知らないでしょう」などと無邪気に彼の感情を煽っていて、なんだか微笑ましい）。今回収録されている「クライスレリアーナ」「子供の情景」そして「アラベスク」はそんな時期に書かれた作品なのだ。

一流の芸術家は、困難な時こそ良い仕事をする。これはベートーヴェン以後、典型的な日本人好みの「芸術家像」ではあるが、この時期のシューマンには確かにそれが当てはまる。作曲家としての手腕、精神はこの時期、確かに一つのピークを迎えていたのである。

その後、二人の結婚は法廷闘争に持ち込まれ、1840年8月に裁判が終結、晴れてロベルトはクララと結婚することになる。ようやく結ばれた二人だが、やがて夫は妻と自分との知名度差に大きく悩んでいくことになるのだった。

◇ アラベスク | ARABESKE OP. 18

後述する「クライスレリアーナ」や「子供の情景」完成の後に作曲されたピアノ独奏曲で、シューマンのピアノ作品の中でも特に親しみやすく魅力的な作品の一つである。

シューマンは1838年の10月から翌年4月まで、ライプツィヒを離れヴィーンに滞在していた。クララの演奏活動、そして自身の執筆活動（経済基盤）をヴィーンに移せばヴィークの執拗な束縛から逃れられると踏んでのことだったが、結局はうまくいかなかった。しかし、結果としてこのヴィーン滞在は実りあるもので、本作を含むいくつかの良作を書き上げると共に、シュベルトの兄フェルディナントの家を訪ね、シュベルトの遺稿の中から未発表の第8番交響曲のスコアを発見したりもした。

「アラベスク」というタイトルはアラビア風の装飾的な模様や芸術を意味するが、この曲の持つ流れるような旋律や装飾的なパッセージからシューマンはこの言葉を選んだのだろう。特定の物語や情景を直接的に描写するものではなく、自由で幻想的な雰囲気を漂わせる作品である。

全体的にロンド形式（A-B-A-C-A）に近い構造を持ち、情熱と内省が交錯するような各セクションのムードの違いはシューマンの双極性障害的な二面性を反映しているとも解釈される。

◇ クライスレリアーナ | KREISLERIANA OP. 16

全8曲からなるピアノ曲集で、1838年、彼が28歳の時に作曲された（なお出版から12年後の1850年に数

カ所改定されている）。今日、シューマンの最も重要なピアノ作品の一つとして知られている。のちにシューマン自身「自作のピアノ作品の中でも最良のものであり、群を抜いている」と語った通り、表現の深さ・幅広さ、そして作曲の手腕は19世紀に書かれたドイツロマンピアノ作品の中でも頂点に位置するものだろう。

タイトルは「ヨハネス・クライスラー」（ドイツのロマン派文学者E.T.A. ホフマンの小説に登場する、いささか常軌を逸した架空の音楽家）を描いた同名の短編小説に由来しており、そのチョイス自体にシューマンの内面的な情熱と詩的な感性が色濃く反映されている。小説の主人公・音楽家クライスラーは、物語の中では情熱的で理想主義的な音楽家でありながら、社会の現実や自身の内面的な葛藤に苦しむ人物である。このキャラクターの二面性—天才性と狂気、情熱と絶望—は、シューマン自身の精神世界や芸術家としての自己認識と深く共鳴した。かつてシューマンは音楽評論上で「ダヴィッド同盟」という架空の芸術家集団を創造し、自身の内なる分裂を、情熱的な「フロレスタン」と内省的な「オイゼビウス」という二人の登場人物を介して表現したが、そうした精神的ジレンマを事実に映し出す存在としてクライスラーを作品の象徴に選んだのである。

またこの時期、シューマンはクララとの結婚を巡る困難（クララの父でシューマンの師でもあるヴィークの強烈な反対）に直面しており、情緒的な動揺や内面的な葛藤が創作にかなりの影響を与えていた。クララへの手紙にも「この曲には君のことがたくさん入っている」と述べており、個人的な感情が作品に深く織り込まれている。

各曲は明確な標題を持たず、番号（第1番から第8番）で分類されている。それぞれの曲は対照的な性格を持ち、急速で激しい曲と緩やかで内省的な曲が交互に配置されている（この対比も前述の「二面性」を象徴していることは論を俟たないであろう）。

各曲はそれぞれ独立しているが、全体として統一感を持つよう緻密に構成されている。シューマン特有のポリフォニックな書法や、突然の調性変化、複雑なリズム、劇的なダイナミクスが特徴で、演奏には高度な技術と深い音楽的解釈が求められる。

◇ 子供の情景 | KINDERSZENEN OP. 15

1837年から1838年に作曲されたピアノのため13曲からなる連作で、シューマンの最も親しみやすく愛らしい作品の一つである。

各曲には子供の視点や無垢な心を表す表題がついており、シューマンは当時婚約者だったクララへの手紙の中で「かつて君に『あなたは時々、子供のように見えます』と言われたことがインスピレーションの源となっている」と述べている。

シューマン自身の弁によれば彼はまず30曲ほどの小曲を書き上げ、その中から12曲を選び出し「子供の情景」と名付けたという。この連作は計13曲であるから、後に1曲足したことになるが、それがどの曲なのかは不明である。彼の個人的な感情や子供時代への郷愁が反映されており、近い時期に書かれた「クライスレリアーナ」や「謝肉祭」など彼の他のピアノ作品と比べると、より穏やかで内省的ではある。しかしながら（子供の、と名付けられてはいるものの）、感情のニュアンスや繊細なタッチを表現するには高い音楽性が求められる。特に第7曲目の「トロイメライ」が有名だが、それぞれの楽曲には子供たちの日常風景を連想させるタイトルがついており、最終曲「詩人は語る」では子供時代を回想する大人の視点が加えられている。シューマン特有のロマンティックな感性が随所に現れる傑作である。なお、シューマンは作品のあちこちに音名による暗号を仕込んだことでもよく知られているが、この曲集の第1曲目「見知らぬ国々と人々 | Von fremden Ländern und Menschen」にも冒頭左手パートにバッハ（Bach）の音名が隠されている。

〔植田彰〕

Ⅱ 稲岡千架

稲岡千架は様々なプロジェクトを通じて名を馳せてきました。彼女は脈々と流れる音楽の「伝統」を重んじ、現代の「生きた音楽」として問いかけてきます。ピアノ協奏曲、室内楽曲、ピアノソロ曲では彼女のために書かれた作品が多くあります。短編ドキュメンタリー映画「広島原爆、魂の撮影メモ（能勢広監督・植田彰作曲）」では全編ピアノソロ演奏を担当し、文部科学大臣賞を授与されました。

2017年よりOMFレーベルから3枚のW.A.モーツァルトのアルバムがベヒシュタイン社（日本とドイツ）の協力によってリリースされています。フォルテピアノを彷彿とさせるような音色をC.ベヒシュタインの名器によって見事に生み出しました。それらは歴史的な楽器にも触れながら、モダンピアノに生かすことを探求し続けてきたからです。このようにして、彼女はモーツァルト作品の演奏家として注目され始めました。

2020年に急性前骨髄球性白血病を患い、現在はピアニストとして再び舞台へと生還しています。2025年1月から3カ月間ドイツ・ライン・ネッカー財団アーティスト・レジデンスとして招聘されました。この期間中にはザクセン州モーツァルト協会からも招聘されました。ドイツ滞在中はモーツァルト、シューマン、植田彰の委嘱初演作品、他の邦人作品の研究を更に進め、各地での演奏会では高い評価を得ました。

室内楽奏者としても国内外の演奏家達と共演し、彼らからは厚い信頼を受けています。稲岡千架は「他者と一緒に創る」ことを好み、共演者や作曲家、プロジェクトに関わる人々と共に、楽器や人々と対話しながら作品を創っています。

また未来の音楽界や人々への文化に対する関心を高める活動も行い、より積極的に動き出しています。コンクールの審査、ルドルフ・マイスター教授のピアノ音楽合宿（日本で最長の単独マスターコース）のプロデュースも手がけています。

京都市堀川高等学校音楽科、東京音楽大学ピアノ演奏家コース卒業。2000年渡独、マンハイム音楽芸術大学芸術家育成課程、ソリスト課程をDAAD（ドイツ政府学術交流会）特別奨学生として修了。ドイツ国家演奏家資格を授与される。

これまでにピアノを故・柳井修、大畑博貴、石附秀美、渡辺健二、Ok-Hi Lee、Rudolf Meisterに、室内楽をAndreas Pistrus、リート伴奏をHeike-D-Allard各氏に師事。

Ⅱ Chika Inaoka

The Pianist Chika Inaoka was born in Hyogo, Japan. She has made a name for herself, especially in Japan, through her various projects. Critics have particularly praised her ability to combine musical tradition with contemporary forms of expression. Piano concertos, chamber music pieces, and solo works have been written for her. In the short documentary film “Hiroshima Bomb, Illusive Photography Memos,” which was directed by Hiroshi Nose, she performed the solo piano. The film achieved the Minister of Education award for fine arts.

She has released three solo CDs of W. A. Mozart’s music on the OMF label, since 2017. This recording project has been in collaboration with Bechstein Japan and Germany. All of these recordings have received critical acclaim. She has performed as a Soloist with the Korean Chamber Orchestra, the Ensemble Roca, and the Philharmonic Orchestra of the Theater Niedersachsen, as well as a chamber musician with members of the Dresden Philharmonic, the New Japan Philharmonic Orchestra, the NHK Philharmonic Orchestra, the Yomiuri Nippon Symphony Orchestra, and the Japan Philharmonic Orchestra. Her concert tours have taken her through Asia, Europe, and North and South America.

Chika Inaoka graduated from Kyoto Horikawa High School of Music and Tokyo College of Music in the Piano Performance Course. From 2000 she studied at Mannheim University of Music and Performing Arts with Ok-Hi Lee and Prof. Rudolf Meister. She completed her postgraduate studies course in 2003 and her “Konzert Examen Soloist Course” with the highest honor in 2005 with the special support of a German government scholarship (DAAD: German Academic Exchange Service). Even then, she had won prizes at international competitions, primarily as a Mozart interpreter. From 2005 to 2020, she taught at the Showa University of Music in Kanagawa, Japan. She is a regular as a Juror at piano competitions, particularly in Japan.

Chika Inaoka was diagnosed with acute promyelocytic leukemia in 2020 and now, she is back on the stage again as a Pianist with her music.

She was invited by the Rhein-Neckar-Kreis foundation in German to serve as an artist in residence from January to April 2025.